

## 第6回 開発経世済民学への期待

はじめまして! 英国はレディング大学で開発経済政策学(MSc Development Economics and Policy)を勉強してます大嶋浩太と申します。レディング大学はロンドンより西に70キロぐらいのところのところに位置し、広々とした敷地に各学部が点在しているのが特徴です。敷地内の環境はすばらしく、池の周りには木が茂り小山があり小動物にも遭遇でき非常に恵まれてると感じております。

さて私が当大学の開発経済学を選んだのも、環境の良さはもちろんありますが私にとっての魅力はモジュラー制であり科目の選択に自分の好みを入れられる点が大きかったと思います。経済学部内での選択にとどまらず、農学部での開発系たとえば、開発途上国での農業開発、食糧問題等の科目が選択可能であったことは、もともと持続可能な農業開発に興味があった私にとってうれしい制度でした。他にはユーロ エイジアン(Centre for Euro-Asian Studies)という学部で、特に東欧の経済移行国の経済開発についての授業が聴講できるのも開発経済の視野を広げるのには有効な選択です。

開発経済学部では、マクロ経済学を中心に開発途上国でのマクロ経済の現状認識を主に議論が進みます。開発途上国経済の資本、工業製品、労働市場の歪曲がどのような状況下で起こるのか、またIMFや世界銀行の経済調整の処方箋はどうあるべきか議論されます。他方、国際貿易と経済開発の関わりについての授業も多く、世界貿易機関で執り行われる多国間交渉の現状を経験豊富な教授陣から教わることができます。

私自身の個人的な感想ですが、開発経済学部の教授の考え方としては、開発途上国経済の国際化支持の印象を受けます。もちろん教授もおっしゃる通り、開発経済のモデルはひとつと言う一辺倒ではなく、地域性による違いをモデルに反映させる必要はありますが、経済政策の効果はその国の初期の経済状態による;例えば、国際貿易のその良し悪しも国内経済の構造によるという考えを学びました。安易にグローバル化を嫌うのではなく、開発途上国がどのようにグローバル化の中で開発経済を成し得るのかに焦点がある感じを受けました。

開発学分野での近年の潮流は住民参加型やジェンダーイシュー、人的開発に見られるように、地域に根付いた開発モデルの重視だと感じていますが、この過程で経済政策がうまく柔軟性を持って関わって行くことが、開発経済のこれからの課題だと思います。開発経済学は私の解釈では、70年初頭から90年頃までの債務問題、南北間経済格差に代表される経済政策失敗による非難はあるものの、今後開発途上国の視点に立った自主性を尊重し、地域色を反映させた開発経済への期待は大いにあると思います。

やはりUK通信の前号の大学同様、レディング大学開発経済学部も非常に国際色が強く、アフリカ、中南米、アジア出身の学生が大半を占めております。NGOや政府機関での職務経験者が多いのも特徴的だと思います。また学科の数に比べて生徒数も比較的少ないと思いますので、先生方との会話もしやすいのが当学部の利点と言えると思います。

レディング大学にはご存知の方も多いと思いますが、International Rural Development Department (IRDD) が高い評価を受けており、その学部の方も経済学部科目を履修されることができるので、学部間を超えての交流が活発なのも事実です。経済学系と農村開発系、それにその他の学部からの学生によって行われる授業は、経済学をツールに多角的な視点から開発学に接してみたいと考えている方に刺激的かもしれません。

2004年2月8日

レディング大学

開発経済政策学修士課程

大嶋 浩太